

ストについて歌つた。

けれどすべてこの奏樂は涙に止み、そしてこの歡こびはキリストの受難の悲しみに融けてきえた。かゝるときに彼はたえまなく歎息をもらし、そして深くわきいづるうめきをもつて、彼の手にもつてゐるそれらのものを忘れたてゝ、彼は天に擧げられるのであつた。

## 第八章 祈りと神聖の業に對する及び己れと他人に於ける靈の歡びのつとめに對する彼の勤勉について

### 九十四

いく年かのあひだ彼はまへに言つたごとくさまざまの病ひに悩んでゐたけれど、しかしながら彼は祈りや神の儀式に於いてかくのごとく敬虔にそして信篤つくあつた、すなはち彼が祈れるかまたは法規の時ごとの祈禱を唱へるときに彼は決して壁または扉口に凭れやうとしなかつた。彼はときとして跪づいたけれど、おほくは直立して頭を露して立つた、そしてことに彼は日と夜のおほかたを祈りにすごした、そのみならず、彼が世界を歩んで旅してゐたときにも彼は時の祈りを唱へようと欲するときには歩みをとめるのをつねとした。けれどももしも彼の病苦のために馬に騎つてゐたときには、彼はかならず祈禱をとなへるために馬を下りた。

あるとき雨がはげしく降つてゐた、そして彼は彼の病ひととしてはなほ大いなる苦しみのために馬に騎つてゐた、そして彼はまったく濡れそぼつてゐたけれど、彼が時の祈りを唱へようと欲し

たときに馬を下りた、そしてかやうに道の真中に立つて雨がたえまなく彼のうへに降りそゞくなかであだかも會堂か庵のなかにあるかの如くに敬虔と尊信の大いなる誠をもつて祈禱句をとなへた。そして彼は彼の伴侶に言つた、「もしも肉體がその食物を食ふのに平和と静けさを欲するならば、それらはともに蟲けらの食物であるのに、しからばいかに大いなる平和と安靜をもつて、そしていかに大いなる誠と敬虔をもつて、たましひは神そのものなるおのが食を受くべきであらう。」

## 九十五

祝福せられたる父はつねにこのことを彼のもつとも高きそして殊なる勉めとしてゐた、すなはち祈りとそして神聖の儀式のほか、彼がたえず内にもおもてにもたましひの楽しさをもつべきことであつた、そしておなじく彼はこのことを彼の兄弟らに見いだすことをことに愛した、そのみならず彼はしばしば彼らを悲しみとおもての歎きのゆゑに謹めた。

されば彼はつねに謂つた、もしも神の僕がこゝろのうちにもそとにも、かの心の純さよりきたりそして祈りの誠によりて得らるゝたましひの楽しさをたまたむことを努むるならば、悪魔どもは彼

を害ふことはできないであらう、彼らはいふであらう、「この神の僕は艱みに於いても榮えに於けるごとくに楽しさをいだくがゆゑに、我々は彼のなかに入るべき。または彼を傷けるべき途がない。」けれど悪魔どもの歎こぶのは、彼がいづれかのしかたできよき祈りより起る敬虔と楽しさとそして他の徳の行ひを消しまたは妨げあたふときである。「もしも悪魔が神の僕に於いて何ものかをおのがものとして領することができるときには、その人が賢き人であつて、それを能ふかぎりすみやかに聖とき祈り、悔い、懺悔そして赦されの徳によつて除き、そして破ることをつとむるにあらざれば、たちまちに悪魔は一つの髪の毛から梁を造つて彼のうへに投げ落すであらう。」

「されば、それゆゑに、わが兄弟らよ、このたましひの楽しさはこゝろの純さとたえざる祈りの篤さよりきたるゆゑに、なんぢらはまづ何ごとにもさきだつてこの二つのことを獲てそしてたもつことをねがひとせよ、それによつてなんぢらはこゝろのうちにもそとにもその楽しさをもつであらうそれは私がつとも大いなるあこがれをもつてなんぢらと私のこゝろに識りそして感ぜむと欲するものであつて、私たちの隣人には徳を建つることとなりそして敵には責めとなるであらう。されば悲しくなることは悪魔とその方人の干かることであつて、たゞなんぢらにはつねに歎こびをして主に於いて楽しくあることが適へることである。」

祝福せられたるフランスは謂つた、「私は悪魔どもが主の私にあたへ給はつた祝福について私を羨んでゐることを知つてゐる、しかしながら私は知りそして見る、彼らはたゞみづからによつて私を害ふことはできない、そして彼らは私の仲間によつて私を害ふことを企てそして欲してゐることを。けれどももしも彼らが私を私みづからにより、または私の仲間によつても、害ふことができないとき、彼らは大いにみだれて退ぞく。いな、もしもときとして私が試るみに逢ひ、または悲しみにみたされてゐるとき、私の仲間たちの楽しさを見ればたちまち彼らの歡こびのために私は私の誘惑と悲しみからうちとそとなる歡こびに歸るのである。」

これらのことのために父みづからはしばしばおもてに悲しみの様子をしてゐるものを諷めるのをつねとした。さればあるとき彼は彼の伴侶たちの一人が顔に悲しみをあらはしてゐるのを叱つて、そして彼に言つた、「何ゆゑにおまへはおまへの犯したことののために、わづらひと悲しみをおもてに示すのか？ おまへはこの悲しみを おまへとおまへの神とのあひだに隠し、そして主がみめぐみに

よつておまへを赦したまひ、そしておまへから罪のために取り去られたる主の救ひの歡こびをおまへのたましひに返しあたへたまふやうに祈れ。しかしながら私や他の人々のまへではつねに歡こびをもつやうに心がけよ、神の僕がその兄弟または他の人のまへに悲しみと煩はされた顔を示すのはふさはしきことではない。」

あらゆる嚴肅と合宜を愛する人なる私たちの父がこの楽しさを笑ひまたはすこしの冗たなる言葉によつて示されることを欲したのであると思ひまたは信じてはならない、これらによつてあらはれるのはたましひの歡こびでなくてむしろ虚しさと同かさである、いな、彼はことに神の僕に於いて笑ひと冗たなる言葉を憎んだ、さればたゞに彼は彼が笑はざるべきことを欲したのみならず、他の人についても笑ひのすこしの原因をも許さなかつた。

されば彼の訓戒の一つに於いて彼は神の歡こびがいかなるものであるべきかをさらにあきらかに述べた、彼は言つた、「かゝる修道者は祝福せらる、その人は主のもつとも聖とき言葉と行ひに於いてにあらざれば楽しさと歡こびをもたず、そしてこれらによつて人を主の愛に楽しさと歡こびに於いてはげます。そして冗たなる虚しき言葉をよるこび、これによつて人々を笑ひにさそふとき修道者は禍ひなり。」

歡こばしげなることゝは、それゆゑに、彼の説くところによればすべての善き業を自由に行はんとする心と肉體の熱心と勤勉と好みと準備であつた、この種類の熱心と好みによつて他の人々はときとして善き行ひそのものによつてよりもさらに勵まされるものである。それのみならず、いかに善き行ひといへども、もしも、悦んでそして熱き誠をもつてなされたやうに見えないときには、それははげますよりもむしろ嫌厭をおこすものである。そしてそのやうにして彼は悲しみを顔に見ることを好まなかつた、その悲しみはもつともしばくすべての善に對する心の憂ひと乖離とそして肉體の懈たりとを示すものであつた、けれど彼はつねにあらゆることとうへに嚴そかさと成熟とが顔や身體の各部と感覺とにあらはれてゐることを彼みづからについても他の人々についても愛してゐた、そして彼は彼のなしあたふかぎり言葉と例しをもつて他の人々にこのやうに爲すことを強ひた。彼は嚴そかさとふるまひの慎しみとが惡魔の弓矢に對して城壁であり強き楯であることを見いだしたのであつた、そしてたましひはこの城壁と楯の保護なしには、あだかも騎士がはだかではなはだ猛きそしてよき武具せる敵が彼の死を欲してやまぬあひだにあるごときものである。

## 九十七

私たちのもつとも聖とき父は、肉體はたましひのために造られてあり、そして肉體の行爲はたましひの行爲のために働かるべきことを思ひ、そしてつねに言つた――

「神の僕は、食すること飲むこと眠ることそして肉體のその他の必要を満たすことに於いて、彼の肉體を慎しみをもつて満足せしめて、兄弟なる肉體が彼に逆つてつぶやくあたはざるやうにせよ、それは言ふであらう、「おれはまつすぐに立つことや祈りをつゞけることはできない、またこゝろのわづらひにあつて歡こぶこともあるひは他の善き業をなすこともできない、おまへがおれの缺乏を満足させないから。」もしも神の僕が慎しみをもつて、そしてふさはしく善くそして適へるしかたでおのが肉體を満足せしめ、しかるに兄弟なる肉體が祈りや通夜やそして善き業に於いて懈り懶け、そして眠たげであるならば、そのとき彼はそれが餌を食ひしかして役にたゝず、荷を負はざることのために、それを悪しき肥えたる獸のごとくに罰すべきである。けれどももしも缺乏と貧しさのために兄弟なる肉體が健やかなるときにも衰へたるときにもその缺くところを得るあたはずして、しか

して、それが謙りをもつて、そして正直にその要するものを彼の兄弟に、または彼の長職に神の愛のために乞ひ、そしてそれがあたへられなかつたときには、彼をしてそれを神の愛のために忍んで堪へしめよ、主はみづからもそれを堪へられたのである、主もまた慰むるものをもとめそして得られなかつたのである。そしてこの缺乏は忍耐と、もに彼のために主によつて殉教の行ひとして數へられる事であらう。そして彼が彼のなすべきこと、すなはち謙だりをもつて彼の缺くところを乞ふことをなしたゆゑに、たとひ彼の肉體はそれがために痛み衰ふるとも彼は救さるゝであらう。」

## 第九章 主が彼に襲ふをゆるしたまはるいくつかの試みについて

九十八

祝福せられたるフランシスがグレッツチオなる隠者小屋に於いて、祈りするためにより大いなる庵室の奥にある最後の庵に住んでゐたときに、ある夜ねむつてほどなく彼は近くに眠つてゐた彼の伴侶を呼んだ、そしてこの人は起きて、祝福せられたる人が眠つてゐた庵の戸まで行つた。

そして聖とき人は彼に言つた、「兄弟よ、私は今夜は眠ることができなかつた、また祈りするときにまつすぐに立つこともできなかつた、私の頭と足はひどく震へる、思ふに私は莠草の入つたパンをたべたにちがひない。」

そして彼の伴侶が同情ある言葉をもつて話したときに、聖とき人は言つた、「けれど私は悪魔が私の頭のしたにしてゐた枕のなかにゐるのだと思ふ。」それは彼が浮世を見すてたのちはかつて羽褥のうへに眠ることや羽根をつめた枕を用ゐることを欲しなかつたけれど、しかしながら兄弟たちはそ

のときに彼の病ひの故に彼の意志に反して彼に強ひてその枕をさせたのであつた。

さう言つて彼はその枕を彼の伴侶に投げだした。彼の伴侶はそれをとつて、おのが左の肩にのせた、そして彼がその庵の闕のそとに出たときに彼はたちまち言語を失ひ、そして枕を卸すことあるひは彼の手をうごかすこともできなくて、たゞそこにまつすぐに立つたまゝ、そこから動くことができずそして彼のなかにまつたく感じを失つた。

けれどいくらかの時のあひださうして立つてゐたときに、神の恩寵によつて、祝福せられたるフランシスは彼を呼んだ、そしてたちまち彼はわれに歸り、そして枕を背のうしろに落した。そして彼は祝福せられたる人のもとに、ふたゝびきたときに彼のうへに起つたすべてのことを告げた。

そして祝福せられたるフランシスは言つた、「夕がた私が晩禱を唱へてゐたときに私は悪魔が庵に入つてくるのを感じた、思ふにこの悪魔ははなはだ巧みな奴である、彼は私のたましひを害ふことができなかったときには肉體の必要を妨げようと欲した、それによつて私が眠りまたはまつすぐに立つて祈りすることがでないやうにして、すなはち彼はこのやうにして私のこゝろの樂しさと敬虔を妨げようと欲し、このことによつて私が私の病ひを恨みつぶやくことを欲したのである。」

### 九十九

彼がサンタ・マリアの處に留まつてゐたときに一つのはなはだ重きたましひの試ろみは彼のたましひの功績たらむために彼に送られた。

それによつて彼は心と肉體に於いていたく惱まされて、あまたゝび兄弟たちとともに在るところからしりぞき隠れた、それは彼がつねになしたごとくにみづからを樂しげに示すことができなかつたからであつた。

けれど彼はそれにもかゝらず食物と飲むものと談話の禁避によつてみづからを責めた、そして彼はさらに篤く祈り、そしてさらにゆたけく涙をながして主がかゝる悩みに於いてみこゝろにかなはゞ彼に適はしき手だてを遣したまふことをもとめた。

けれど彼がこのやうにして二年あまりの永いあひだ悩んだときに、ある日彼がサンタ・マリアの會堂で祈つてゐたときに彼の靈に於いて福音の言葉は彼に告げられた――

「もしもなんぢ一粒の芥子ほどの信をもたば、なんぢはこの山にむかひて、こゝよりかしこのとこ

ろに行けと謂はむとき、それは動き行くべし。」

たちまち聖とき父は神に答へた、「主よ、その山とは何か？」そして答へられた、「その山とはなんぢのうくる試ろみである。」聖とき父は言つた、「されば、主よ、おんみの曰ひたまふごとくに私のうへに成れ。」そしてたゞちに彼はまつたく解きはなれて、彼がいかなる試ろみをもうけなかつたごとくに思はれた。

おなじやうにラ・エルニアの聖とき山に於いても、彼が主の烙印を肉體のうへにうけたときに、彼は悪魔どもからあまたの試ろみと誘惑に悩まされて、つねのごとくに兄弟たちに楽しきやうを示すことができなかつたほどであつた、そして彼はつねに彼の伴侶に言つた、「もしもいかに多くのそしていかなるわづらひと悩みを悪魔どもが私に起すかを兄弟たちが知つたならば、彼らの一人として私に對して憐れみといたましさに動かされぬものはないであらう。」

## 百

彼の死ぬる二年まへに、彼がサン・ダミアノに於いて一つの蘆をもつて造られた小さき庵にゐて、

彼の眼の病ひによつてはなはだしく悩まされて、六十日あまり日の光も火の光も見ることができなかつたときに、神の許しによつてそして彼の艱みと功績を増すためにあまたの野鼠が彼の庵に入りきたり日も夜も彼の庵のなかで彼のあたりを、彼のうへを走りかけつて彼に祈ることもまた靜かにしてゐることもさせなかつた、のみならず彼が食するときには野鼠どもは彼の食卓のうへに這ひあがつてそしていたく彼を煩はした。されば彼にも彼の伴侶たちにもそれが悪魔の試みであることはあきらかに顯はれた。

祝福せられたるフランシスは、それゆゑに、彼の身がそのやうにおほくの悩みをもつて罰せられてゐるのを知つて、ある夜いたまひささうごかされて、こゝろのなかに言つた、「主よ、私の煩ひに目をとめて助けを下し給へ、それによつて私が心づよくそれらに堪へ忍びうるために。」

そしてたちまち彼のたましひのなかで謂はれた、「語れ、わが兄弟よ、もしも何人かゞなんぢにこのなんぢの病ひと煩ひの酬いとして大いなるそして貴とき寶をあたへ、全地をもつてこれに比ぶるも、その大いなる寶にくらべては何ものにもあらぬならば、なんぢは大いに歡ばしくないか？」

そして祝福せられたるフランシスは答へた、「おゝ主よ、その寶はいと大いなる、そしてはなはだ貴とき、讃ふべき、そしてねがはしきものでありませう。」

そして彼はふたゝび彼に謂はれるのを聞いた。「それゆゑに、わが兄弟よ、なんぢの病ひと煩ひに於いて歡ばしく樂しくあれ、そしてこのところは、なんぢがすでにわが王國にあるがごとくに安らげくあれ。」

そしてはやく起きて彼は彼の伴侶に言つた、「もしも皇帝が一人の奴隸に全たき王國をあたへたならば、奴隸は大いに歡ぶべきではないか？　もしも彼に全たき帝國をあたへたならば、彼はなほさらに大いに歡ぶべきではないか？」

そして彼は彼らに謂つた、「それゆゑに私は私の病ひと煩ひに於いて大いに歡ばしくあるであらうそして主に於いて強く、そして父なる神とその獨りの御子われらの主イエスキリストに、そして聖靈にむかつて、主によつて私にあたへられたるかゝる恩寵のために感謝しよう、それはすなはち主は私に、彼の値ひなき僕に、なほ肉に生けるものに、彼の王國を確かめて下さつたことである。されば私は主の讚へのために、そして私たちの慰さめのために、そして隣人の徳を建つるために主の被造物について新しき讚美を作らうとおもふ、私たちは日々この被造物を用ゐ、そしてこれなくして私たちは生くるあたはず、しかもこれに於いて人の族はしばしば彼らの造り主に罪ををかす、そして私たちはかくのごとくおほき恩寵に對してつねに感謝せず、私たちがなすべきところであるのを教へた。」

に、神、すべてのものゝ造り主、與へたまふ主を讀へなむ。」

そしてすわりながら彼はしばらく靜かに思ひはじめた。そしてしかるのちに彼は言つた――

「もつとも高き、全能なる、善き主よ。」

そして彼はこれについて一つの歌をうたつた、そして彼の伴侶たちにこれを唱へそして歌ふことを教へた。

されば彼のたましひはそのとき大いなる慰さめと甘美の心ちにあつた、そして彼はフラテ・パチフィコ、世のなかでは歌の王と呼ばれて、まことに宮廷の歌人の師であつた人を迎へさせようと欲した、そして彼はいくたりかの兄弟を彼にあたへて、彼らが彼とともに説教しつゝそして主の讚美を歌ひつゝ世のなかを旅して往くことを欲した。そして彼は言つた、彼は彼らのなかでもつともよく説教することを知つてゐるものはまづ民たちに説教し、そして説教ののちに彼らはみなともに主の巡歴歌人のごとくに主の讚美を歌ふことを欲すると。そして讚美が終つたならば、説教者は人々にむかつて言はなければならぬ、「私たちは主の歌人である、そしてこれらの歌のために私たちの



ねがふ報酬は、すなはち、なんぢらがまことの悔い改めにあらむことである。」  
そして彼は言つた、「神の僕は人々の心を擧げて彼らをたましひの歡びにうごかす主の歌人にあらすして何であらう？」そしてこのことを彼はことに神の民たちに彼らの福祉のために贈られたる小さき兄弟たちについて言ふのであつた。

## 第十章 豫言の靈について

### 百一

祝福せられたるフランスが、さきにいはれたる被造物の讚美、彼が「太陽の歌」と呼んだものを作つたのちにあつて、アッシジの市の司教と市長マヨールのあひだに大いなる不和が起された、そして司教は市長を破門し、そして市長はすべての人に何人も司教と何ものをも賣り買ひせずまたはいかなる契約をもなさざるべきことを命じた。

祝福せられたるフランスは、このことを聞いたときに病んでゐたけれど、彼らのために憐れみのこゝろを動かされた、それはことに何人も彼らのあひだに和解をなさしめむとして仲だつものがなかつたからであつた。そして彼は彼の伴侶たちに謂つた、「司教と市長とがこのやうにたがひに憎みあひ、そして何人も彼らの平和に仲立たうとしないといふのは私たちに、神の僕たちに大いなる恥ぢである。」

そしてそのやうにして彼はたゞちにさきに謂はれたる讚美にそのことのために一つの詩句を作つ

おんみは讚へられむ、わが王よ、おんみの愛のために赦し、

病ひと艱みを堪へしのぶものによりて、

これらを平和をもて忍ぶものは福ひなるかな、

そは、もつとも高きものよ、おんみによりて彼らは冠せらるべければ。

しかしてのち彼は伴侶たちの一人を呼んで、そして謂つた、「市長のもとに往き、そして私の名に於いて彼に、市の貴人らそして彼の伴はむと欲する他の人々とともに司教のもとに來ることを命ぜよ。」

そしてその兄弟が往つたあとで彼は伴侶たちのうちの二人の他のものに言つた、「往つて司教と市長とそして彼らとともにある他の人々のまへに兄弟なる太陽の歌を歌へ、そして私は主がたゞちに彼らのこゝろを謙らせたまひ、そして彼らが彼らのはじめの愛と友情に返るべきことを主に信頼してゐる。」

彼らが司教の宮の僧房のひろき庭にみな集まつてゐたときに、これらの二人の兄弟たちは起つてそしてその一人は言つた、「祝福せられたるフランチェスコは彼の病弱のあひだに被造物について主の讚美の歌を、その主の讚へのために、そして彼の隣人らに徳を建つるために造つた。それゆゑ彼はあなたがたがそれを大いなる敬虔をもつて聴かむことをあなたがたに乞ひます。」

そしてこのやうにして彼らは語り、そして歌ひはじめた。けれど市長はたちまち起つて、そして手と腕を又まねき組んで熱心にこれらの歌に聴き入り、あたかも主の福音を聞くごとくに大いなる敬虔とそしてあまたの涙をもつてした、それは彼が大いなる信仰と敬虔を祝福せられたるフランシスに對してもつてゐたからであつた。

主の讚美が終つたときに、彼らすべてのまへで市長は謂つた、「まことに私はあなたがたに曰ふ、私が私の君とせむことをねがひ、そしてそのやうになすべき人、わが司教の君に對してのみならずもしも何人かゞ私の血族または私の子を殺したとても私はその人を赦しませう。」そしてさう言ひながら彼は司教の足のもとに身をひれふしてそして謂つた、「御覽なさい、私は何ごとについてもあなたの欲するごとくに和解をしようと思ひます、われらの主イエス・キリストとそして彼の僕祝福せられたるフランチェスコの愛のために。」

けれど司教は彼の手をとつて扶け起しそして言つた、「私の職として私がひくゝ謙つてあるべきものであります、しかるに私は生れつき怒りやすい、それをあなたは私のために赦して下さるべきであります。」

そしてこのやうにしておほくの優しさと愛をもつて彼らはたがひに抱きそして接吻した。けれど兄弟たちは祝福せられたるフランシスが彼らの和解について豫言したことが文字どほりに満たされたるを見ておどろきそして歎んだ。そしてそのところにゐたすべての人々はこのことをはなはだ大いなる奇蹟と考へ、そのすべてを祝福せられたるフランシスの功績に歸した、それは主がそのやうにすみやかに彼らを訪れたまひ、そして彼らがほとんど一言もいさずしてかゝる不和よりかゝる諧和にかへつたからであつた。

けれど祝福せられたるフランシスとともにあつた私たちは證しする、彼が何人かについて、「かくのごとくなり、」または「かくあるべし、」と言つたことはつねにかくのごとく文字どほりに起つた。そして私たちはこれについてそのやうにあまたゝびそしてそのやうにおほくを見た、そしてそれを書きまたは語れば長くなるであらう。

## 百二

あるとき一人のおもてには正直なそして聖とい交はりをなせる兄弟があつて、晝も夜も祈りについでには勤勉なるごとく見え、そしてときどき司祭に懺悔するにさへも言葉をもつてせずしてたゞ手まねをもつて懺悔するをつねとしたほど恒ねに沈黙の行を守つてゐた。

されば彼はそのやうに敬虔に、そして神の愛にあつきものと見られ、ときとして彼の兄弟らとともにすはつてゐるときに、彼は語らないのであつたけれど、なほ彼はかゝる善き言葉を聞くときうちにもそとも楽しまされた。そしてこのことからあまたゝび彼は他の兄弟たちを敬虔にみちびいた。

けれど彼が幾年かこの種類の生活に留まつてゐたときに、彼の住んでゐた處へ祝福せられたるフランシスがきた。そして聖とき父は兄弟たちからこの人のありさまを聞いたときに彼らに謂つた、「まことに知れ、彼が懺悔することを欲しないのは悪魔の試みのためである。」

そのときにミニストロ・ジュネラレは聖とき人を訪れてこゝにきて、そして祝福せられたる人にか













の能ふかぎりに於いて欲しそして命する、何人がミニストロ・ジュネラレであつてもその人は私みづからのごとくに彼を愛しそして敬はなければならぬ。そしてミニストロとそして全團體のすべての兄弟らをして彼を私みづからのごとくに思はしめよ。」そしてこれをもつてフラテ・ペルナルドと他の兄弟たちとは大いに慰さめられた。

祝福せられたるフランシスは、そのフラテ・ペルナルドのはなはだ大いなる完全を思ひみて、ある兄弟たちのまへで豫言して、そして言つた、「私はなんぢらにいふ、もつとも大いなるしかしてもつとも慧しき悪魔のあるものがフラテ・ペルナルドに戦ひをいどんでゐる、彼らは彼のうへにあまたのわづらひといさなひをもちきたす、けれど慈しみふかき主は彼の終りに近づくときにすべてのわづらひといさなひを取りのぞきたまひ、そして彼のたましひと身を大いなる平和と慰さめに置きたまふ、さればこのことを見るすべての兄弟たちは大いにおどろきそれを大いなる奇蹟と考へるであらう、そしてそのたましひと肉體の和らぎと慰さめに於いて彼は主にとこの世から過ぎわたるであらう。」けれどこれらのことはみだ、祝福せられたるフランシスからこれを聞いたすべての兄弟たちの大いにおどろいたことであつたが、フラテ・ペルナルドに於いて言葉どほりに満たされた。さればフラテ・ペルナルドは死の苦しみに於いても、臥すことを欲しなかつたくらゐに、それほどふかきところ

の和らぎと慰さめをもつてゐた。そしてもしも彼が臥すときには、彼はあだかもすはつてゐることによこたはり、そして彼の頭にのぼりきたるすこしの呼吸もすこしも彼が神について静かに思ふことを、眠りまたはいかなる幻想によつても妨げることはなかつた。そしてもしもかゝる心ちがいにかかして生ずれば、彼はたゞちに起きあがつてみづからを打つてそして言つた、「それは何であつたか？ 何故私はかく思つたか？」彼は薬を用ゐようと欲しなかつた、そしてこれをすゝめる人々に言つた、「私を妨げてはいけない。」そしてそののちは、彼がなほさら自由にそして安らかに死なむために、彼の肉體のすべてのつとめを一人の醫者であつたある兄弟の手にゆだねて、そして言つた、「私は食ふこと飲むことについて心づかひしたくない、たゞそれらを私はなんぢに任せる、なんぢがあたへれば私は取る、もしもなんぢがあたへなければ、私はもとめはしない。」けれど彼が衰へはじめたときに、彼は彼の近くに一人の司祭を彼の死の時にいたるまでもつことをねがつた、そして何ごとか彼の良心に重きを加へるものがこころにきたるごとに、たゞちに彼はそれを懺悔した。けれど彼が死んだのち彼のからだは白くそしてやはらかであり、そして彼は微笑んでゐるやうに見えた。されば彼は生けるときよりも死ねるときになほ美しくなつた、そしてすべての人は生けるよりも死ねる彼を眺めることをよろこんだ、彼はまことに微笑める聖者のごとく見えた。

祝福せられたるフランススが世を去つた週に、たふときキアラ、アッシジのサンダミアノなる貧しき姉妹たちの第一の草、福音の完全を守ることに於いて聖ときフランススのもつともすぐれたる競争者であつた貴女は、彼よりもさきに死ぬことを恐れた、それは二人ともにそのときおもく病んでゐたからであつた、そして彼女はもつともはげしく泣きかなしみそして慰さめられなかつた、彼女はおのが死ぬるまへに神について唯一なる父、祝福せられたるフランススを、彼女の慰藉者たり師たりそして彼女を最初に神の恩寵のなかに置いた人を見ないであらうと思つた、そしてそれゆゑに彼女はこのことをある兄弟によつて祝福せられたるフランススに告げた。

それを聞いて聖者は憐れみをもつてうごかされた、それは彼女が彼女を父の慈しみをもつてことに愛したからであつた。けれど彼女のねがふこと、すなはち彼と相見ることのなりがたきを思つて、彼は彼女に手紙をもつて、彼女と彼女の姉妹たちのすべての慰さめのために彼の祝福を書き送つた。そしてもしも彼女が戒しめに對し、神の子の教へと掟に對して何ごとか罪があつたとしても、彼女

をすべての罪過について減罪せりとした、そして彼女がすべての悲しみとわづらひを捨て去るために彼は彼女の遣した兄弟に曰つた、「往つてそしてキアラに、私を見ることができない故にといふ悲しみや憂ひをやめよと乞へ。彼女に知らせよ、まことに彼女の死のまへに彼女と姉妹たちは私を見るであらう、そして私についておほく慰さめをうけるであらう。」

しかるにかくのごとくになつた、すなはちしばらくのちに祝福せられたるフランススは夜この世を去つた、そして朝はやくアッシジの市の民と司祭らはことごとくきたり、そして彼の聖とき骸を彼の死んだ處から運びだし、彼らの各々は手に木の枝をたづさへて、讚美と歌をうたつて、このやうにして彼らは彼を、神の意志によつて、サンダミアノに運んだ、すなはち主が祝福せられたるフランススに由つて主の娘たちと主の婢女たちを慰さめるために曰はれたる御言葉が完たくされるためであつた。そして神のことばをつたへそして聞くときにつねに開かれる鐵の格子を除いて、兄弟たちは聖とき骸を柩より擧げて、彼らの腕に支へてしばらくのあひだその窓にむかはせた、そして貴女キアラと彼女の姉妹たちが彼について慰さめられたまでさうしてゐた、けれど彼らは、かゝる父の慰藉と訓へをうばはれたのを見て、ふかき悲しみと涙にみちりしてぬれてゐた。

ある日彼がアッシジの司教の宮に病み臥してゐたときに、一人のこゝろたふとき兄弟が彼に言つた、あだかもたはむれのごとくに、微笑みながら、「いかほどの價におまへはおまへのすべての糞衣を主に賣らうと思ふか？ いまは粗布をもつて衣とせるおまへのこの小さき體のうへにはあまたの龕や絹の柩衣がきせられるであらう。」そのとき彼は粗布をもつて縋帯し、そして衣服もまたおなじ粗布であつた。そして祝福せられたるフランシスは答へた、けれどまことは彼ならずして彼に由つて聖靈が答へたのであつた、そして曰つた、たましひの大いなる熱誠と楽しさをもつて、「なんぢのいふところはまことである。私の神の讚へと恩寵のためにそのやうになるであらう。」

## 第十一章 外的事物に關して彼についての神の攝理について

祝福せられたるフランシスがリエティの近くなるファンテ・コルンボの隠者小屋にゐたときに、彼の眼の病のためにある日一人の眼醫者が彼を訪れた。

彼が聖とき人とともにしばらく留まりそしていまそこを去らうと欲したときに、祝福せられたるフランシスは彼の伴侶たちの一人に曰つた、「往つて醫者にもつともよき食物をそなへよ。」そして彼の伴侶は答へた、「父よ、申すも恥しいことながら、私たちはいまことに貧しくて彼を食事招くことを恥ぢるほどでございます。」

祝福せられたるフランシスは彼の伴侶たちに言つた、「あゝおまへたち信仰すくなきものよ、それについて私にそれ以上言はせるな。」そして醫者は祝福せられたるフランシスに曰つた、「兄弟よ、兄弟たちが貧しくあるゆゑに、私はそれだけ悦んで彼らとともに食事しようと思ふ。」

その醫者ははなはだ富んでゐた、そして祝福せられたるフランスと彼の伴侶たちはしばしば彼を招いたけれど、しかしながら彼はかつてそこで食べることをねがはなかつた。

それゆゑ兄弟たちは行つて食卓をまうけた、そして恥ぢらひをもつてそのうへにすこしのパンと葡萄酒、そして彼らみづからのために用意してゐたすこしの甜菜とをそなへた。そしてその貧しき食卓にすわつて彼らが食べはじめたときに、見よ、その住處の戸をおとなふものがあつた。そして兄弟らの一人が、起つて戸を開きに行つた。見よ、そこにはある一人の女がよきパンと魚と蟹の肉饅頭と、蜜と葡萄酒をみたした大いなる籠をたづさへて立つてゐた、それは七哩ばかりはなれたある城主の妻が祝福せられたるフランスに贈つたものであつた。

これを見て兄弟たちと醫師とは大いによろこび、聖フランスの聖とさを思ひ、そしてすべてを彼の功績に歸した。そして醫者は兄弟たちに謂つた、「私の兄弟たちよ、あなたがたもまた私たちがこの人の聖とさをまことには知らなかつたのである。」

## 百十一

またあるとき彼がアッシジの司教の家にて重く病んでゐたときに、兄弟たちは彼に食することをすゝめた。そして彼は答へた、「私は食べるものは欲しくない、けれどもしも鱒といふ魚をすこし得ることができたならば、あるひは食べることもできるかもしれない。」

そして彼がかう曰つたときに、ある人が一つの蘆で編んだ籠をたづさへてきた、そのなかには三匹の大いなる鱒がよく料理してあつて、そしていくつかの蟹もあつた、それらを聖とき父はよろこんで食べた。そしてこれはリエティのミニストロなるフラテ・ジュラルドが彼に贈つたのであつた。

そして彼らは僕のためにこれらのそのとき冬であつたのでアッシジでは得がたいものであつたものをそなへられた神の攝理のために神をほめたゝへた。

## 百十二

聖者がそれによつて死んだ最後の病ひをもつてサンタ・マリア・デリ・アンジュリの處にて惱んでゐたときに、ある日彼は彼の伴侶を呼んで曰つた――

「なんぢはいかにヤコバ・デイ・セッテソリ夫人が私たちの團體に對してまめやかに心をつくした人で

あつたかを、そしてあるかを知つてゐる。そしてそれゆゑに私は思ふに、彼女は、もしもなんぢが私のありさまを彼女に知らせ、そしてことに彼女に使を送つて、私にいくつかの灰のごとき色をした僧衣を送ることを、そしてその衣服とともに彼女がしばらく都に於いて私のために造つてくれたあの菓子とを送るべきことを請ふならば、それによつて彼女は大いなる恩寵と慰藉をうるのであらう。」

ローマの人はその菓子をモスタッチュオロと名づけた、それは巴旦杏と砂糖とその他のものをもつて造つたものであつた。

この夫人はまことにたましひの貴とき人であつてそしてローマ全市のもつとも富める、そして高貴なる人の寡婦であつた、そして彼女は祝福せられたるフランスの功績と説教によつて、主からおほくの恩寵をさづけられて、新しきマグダレナのごとくに見ゆるばかりつねにキリストの愛となつかしさのために涙と敬虔にみちてゐた。

彼らはそれゆゑ聖とき人の謂つたごとくに手紙を書いた、そして一人の兄弟はこの貴婦人のもとへ手紙をもつてゆくべき兄弟をさがしに往つた。

そしてたちまち住處の戸をたゞく音がした。そして戸が一人の兄弟によつて開かれたときに、見

よ、ヤコブ夫人がそこにゐた、彼女は大いにいそいで祝福せられたるフランスを訪れにきたのであつた、そしてその兄弟はいそいで祝福せられたるフランスのもとに行き、大いなる歡こびをもつて彼にいかにヤコブ夫人がローマから、彼女の子息とそしてあまたの他の人々とともに彼を訪れにきたかを告げた。そして彼は曰つた、「私たちはどう取り計ひませうか、父よ、私たちは彼女が入つてあなたのお側にくることを許しませうか？」

けれど彼がかう曰つたのは、聖フランスの意志をもつて、その處には女が入ることを許さず、そしてそれはその處のもつとも重んずべきふさはしさと敬虔のためであることが命令されてゐたからであつた。

そして聖ときフランスは曰つた、「その掟はこの貴婦人については守るにおよばない、彼女の大いなる信仰と敬虔とが彼女をして遠いところからこゝまで來させたのであるから。」

夫人はそれゆゑ祝福せられたるフランスのもとに入つた、そして彼のまへにおほくの涙をながした。そして一つの奇蹟を見よ、彼女は一つの葬衣、すなはち上衣とすべき灰色の麻布とそしてすべてその手紙のなかに含まれてゐたものをみな、あたかも彼女はその手紙をうけとつたかのやうに己れとともに携へてきた。

そして夫人は兄弟たちに曰つた、「私の兄弟たちよ、私が祈りしてゐましたときに私のたましひに於いて告げられました、往つておまへの父君、祝福せられたるフランチェスコを訪へ、そして遅れ  
てはいけない、もしもあまりに遅なれば、おまへは彼に生きながら遭ふことはできないであらう  
そして上衣となすべきこれ／＼のやうな布、そしてしかじかのものを携へてゆけ、そしておまへは  
彼のために例の菓子をつくらなければならぬ。おまへはまた燈とすべき蠟をゆたけくもつてゆけ  
また香をもつ一行け。」けれどこれらすべては香のほかは送られるべきであつた手紙に含まれてゐ  
たものである。

それはすなはち三人の王たちのころに入つて捧げものをたづさへて聖誕のとき御子を譽れあら  
せむために行かしたまひたる主が、またこの貴とき聖とき夫人をうごかして主のもつとも愛せら  
れたる僕に、その死、いなそのまことの誕生のときに譽れをなすためにさゞげものをたづさへて往  
かしたまふたのであつた。

夫人は、それゆゑ聖とき父が食することをねがつてゐた料理をそなへた。けれど彼はたゞすこし  
く食べた、彼はすでにたえず衰へ、そして死に近づきつゝあつた。

彼女はまたおほくの蠟燭をつくらしめて彼の死ねるのちに彼のもつとも聖とき骸のまへにもやさ

れるためにした。そしてかの麻布については、兄弟たちは彼のために一つの上衣をつくり、それを  
着せて彼を葬つた。けれど彼みづからは兄弟たちに命じて一つの覆衣を彼の蔽ひとして縫はしめた  
そしてそれは謙だりとたふとき貧賤の愛姫のしるしとして、そして範例としてであつた。

そしてヤコバ夫人のきた週に於いて、私たちのもつとも聖とき彼は主へと去られた。

## 第十二章 彼の被造物に對する、しがして被造物

### の彼に對する愛について

#### 百十三

神の愛にまつたく包まれて、祝福せられたるフランスは、たゞにすべての徳の完全をもつて飾られたるおのがたましひに於いてのみならず、あらゆる被造物に神の善意を完全に識つた、それゆゑ彼は被造物に對してふしぎなるそしてあふるゝ愛をもつてゐた、ことに何ごとか神にまたは團體に關するものを顯はしてゐる被造物を愛した。さればあらゆる鳥のうちにも彼は雲雀と呼ぶるゝ、もしくは人によつて頭巾をかぶつた雲雀と呼ばれる一種の小鳥を愛した。

そして彼はそれについて謂つた、「姉妹なる雲雀は修道僧のごとくに頭巾をもつてゐる、そして彼女は謙れる鳥である、彼女はこんで道のうへに行きそこで餌をもとめる、そしてもしも彼女がその食物を汚ない泥のなかで見いだせば彼女はそれをとりだしてたべる。けれど彼女は翔りながらいとも美はしく神を讃へる、あたかも善良なる修道僧が地上のものを輕んじて、その交はりはずねに

天づくにあり、こゝろはずねに神を讃へることにあるそのやうに。彼女の羽の衣服は土のごとく、そして彼女が修道僧にあたへる範例は、彼らが柔らかき、美しき衣服をもたず、たゞ價も色も賤しくしてあだかも地が他の元素よりもいやしきがごとによといふことである。」

そして彼はこれらのことをこの鳥たちに見たので、彼はもつとも好ましく彼らを眺めた。

それゆゑ主の御旨によつてこれらのもつとも聖とき小さき鳥たちは彼の死ぬるときに於いて彼に對する愛情のしるしを示した。彼が主へと過ぎ行かれた夜のまへに、土曜のくれがたに、晩禱のうちに、雲雀といふ小鳥の大いなる群れは彼が臥してゐた家の屋根にきた、そしてあたりを飛びめぐつて屋根のまはりに輪をつくつて、妙へに歌ひつゝ、おなじやうにして主を讃へるやうに思はれた。

#### 百十四

祝福せられたるフランスとともにあり、そしてこれらのことを書く私たちは、あまたたび私たちが彼のかう曰ふのを聞いたことを證しするものである——

「私がもしも皇帝と語ることがあつたら、私は、彼に請ひして説きすゝめて、彼に神と私の愛の

ために一つの特別な法律を作らせ、何人も姉妹なる雲雀たちを捕へまたは殺し、または彼らに何らの害をも加へてはならないやうにしたい。おなじく町々の市長たち、城市や村々の領主たちは年ごとに聖誕祭の日に民たちをして小麦やその他の穀物を市や城のそとに撒かしめるやうにしなければならぬ、さうすれば私たちの姉妹、雲雀たち、そしてまた他の鳥たちも、かゝるたふとき日に食べるものを得ることができよう。そしてその夜にはもつとも祝福せらるゝ處女マリアが一頭の牡牛と驢馬のあひだに秣槽のなかにうみたまひたる神の御子の尊敬のために、牡牛と驢馬とをもつ人は何人たりともその夜にはよき秣草のうちでもつともよきものをもつて彼らを飼はなければならぬ。おなじくその日には、すべての貧しき人々は富む人々によつてよき食物をもつて満足されなければならぬ。」

「祝福せられたるフランシスはことに聖誕の日についてほかの祭り日のいづれよりも大いなる尊敬をもつてゐた、そして「主が私たちのために生れたまへる故に、私たちは救はれなければならぬ、」といひ、そしてそれゆゑに彼はその日には基督者たるものがみな主に於いて歡び、そして御身を私たちにあたへ給へる主の愛のために、人がみなたゞ貧しき人々に對してのみならずまた動物や鳥たちのためにもゆたかに食物を設けることをこひねがつてゐた。」

## 百十五

彼がリエティに近いフォンテ・コルンボの隠者小屋に、彼の眼の病の治療のためにきてゐたとき、彼はわがオスチアのカルチナレの君に對する従順によつて、そしてミニストロ・ジュネラレなるフラテ・エリアによつてこの療治に強ひられたのであつたが、ある日に醫師が彼のもとにきた。この人は病をみて、祝福せられたるフランシスに彼が頬から病の重い方の眼の眉にかけて灼焼手術をしようと思ふと謂つた。

けれど祝福せられたるフランシスはフラテ・エリアがそこにくるまでは治療をはじめることを欲しなかつた、それは彼が醫師がその手術を始めるときにはそこに立ち合はうと思ふと曰つたからであつて、そして彼みづからは己れのためにそのやうに煩ひをかけることを恐れ、そして心をいためそしてそれゆゑに彼はミニストロ・ジュネラレがすべてを爲さしめることを欲したからであつた。

それゆゑ人々が彼を待つてゐて、そして彼はあまたの障礙のためにそこに來なかつたときに、祝福せられたるフランシスはつひに醫師がその欲するまゝに行ふことを許した。



そして灼焼手術をするために鐵を火のなかに置いたときに、祝福せられたるフランシスは、彼が失神しないために、彼の心を強くすることを欲して、火にむかつてこのやうに謂つた、「私の兄弟なる火よ、あらゆる被造物のうちにも貴とくそして益あるものよ、かゝるときに私に親切であれよ、私はかつてなんちを造られた主の愛のためになんちを愛したそして愛するのであるから。けれど私は私たちを造られた創造の主の君に、主がなんちの熱を和らげて私がそれに堪へあたふほどにして下さることを祈らう。」そして祈りを終つて、彼は火のうへに十字架のしるしをもつて印した。

けれど私たち彼とともにあつたものは、彼に對する同情といたましきから、そのときみなそこから遁れた、そしてひとり醫師が彼とともに残つた。

しかるに手術が終つて私たちが彼のところにかへつてきたときに、彼は私たちに曰つた、「おゝ臆病者よ、信少きものよ、何故におまへたちは遁げたのか？ まことに私はおまへたちに曰ふ、私はすこしの苦痛も、また火の熱をも感じなかつた、いな、もしもいま十分に灼くことができなかつたならば、彼になほまたもつとよく灼かせよう。」

そして醫師は大いに驚いて、そして曰つた、「私の兄弟たちよ、私はあなたがたに曰ふが、私はこのやうに衰へ惱める人に對してのみでなく、もつとも健やかなる人に對してさへもこのやうに大き

い灼焼手術に堪へることができるかどうかを氣遣ふのです。けれどこの人は身動きもせずすこしの苦痛の様子をも示されませんでした。」

そして耳から眉のあひだのすべての血管が切り開かれたのであつた、そしてそれは彼にすこしも効を奏さなかつた。おなじやうに一人の他の醫師は彼の兩方の耳を赤く熱した鐵をもつて灼いた、そしてそれは彼に何の益をもなさなかつた。

しかしながら火やその他の被造物が彼に服従しそして彼を敬つたことはふしぎではない、何となれば、彼とともにゐた私たちがあまたたび見たごとく、彼は彼らに愛着し、そして彼らをもつて歡こび、そして彼のこゝろは彼らに對して慈しみと情けに動かされて、それゆゑ彼は彼らがはしたなく取り扱はれてゐるのを見ることを好まず、そして彼は彼らが理性をもつてゐるかやうに彼らとこゝろのうちとおもての楽しさをもつて語るをつねとして、そして彼らによつて、しばしば神につままれることがあつた。

すべての低きそして無心なる被造物のうちで彼はことに火に對してその美しさと善き益のゆゑに惹きつけられた、それゆゑに彼は決してそれのはたらきを妨げようと欲しなかつた。

さればあるとき彼が火のそばにすわつてゐたときに、彼の知らぬまに、それは彼の下着の膝のあたりに燃えついた。彼は火の熱さを感じたときに、それを消さうと欲しなかつた。

けれど彼の伴侶は彼の着物の焼けるのを見て、火を消さうと思ひながら彼のところに走りよつたけれど彼はそれを禁じてそして曰つた、「いな、愛する兄弟よ、火を傷つけてはいけない。」そしてこのやうに彼は決してそれを消させなかつた。

そのとき彼はいそいで彼の守人なる兄弟のところに往きそして彼をして祝福せられたるフランスのところに来させそしてたゞちに祝福せられたるフランスの意志に反して火を消させた。

そのやうにしていかなる必要が迫つてゐるときにも彼は一つの焚火、燈火または蠟燭を消すことを欲しなかつた、それほどの慈しみを彼はそれに對していだいてゐた。

また彼は兄弟がよのつねのごとくに火または煙れる薪を一つのところから他のところへ投げだすことを許さなかつた、かゝるときには彼らはたゞそれを地のうへに置くべく、それは創造の由るところなる主の君に對する敬虔のためであつた。

## 百十七

彼がラ・エルニアの山でレントの精進を保つてゐたときに、ある日彼の伴侶は食事の時刻に、彼がつねに食事する庵に一つの火をたいた。

そしてその火が焚かれたときに彼は聖とき人が祈りをしてゐたほかの庵へ行き、ミサの書を携へて行つた、それは彼が聖フランシスのためにその日の福音を讀むためであつた、彼はミサを聞くことができないときには、つねに彼の食するまへにその日のミサとして讀まれる福音書を聞くことを欲してゐた。

そして彼がその火の焚かれてある庵に歸つてきたときに、見よ、火の焰は屋根にまで達してそれを燃やしてゐた。けれど彼の伴侶は能ふだけその火を消すことをはじめ、けれどひとりで爲すことはできなかつた。しかしながら祝福せられたるフランシスは彼に力を添へることを欲しなかつた、けれど彼は彼が夜に身を蔽ふものとしてゐた一枚の毛皮をとつて、それをもつて森のなかに去つた。そしてその處の兄弟たちはその庵から遠くはなれて棲んでゐたのであつたが、それが燃えてゐる

ことを聞いて、たゞちにきてそして火を消した。

のちに祝福せられたるフランスは食事に歸つてきた、そして食了つたときに彼は彼の伴侶に曰つた、「私はふたたびその毛皮をからだに着ようと欲しない、私の貪慾のために私は兄弟なる火にそれを食することを許さなかつたのであるから。」

### 百十八

火については彼は殊に水を愛した、これによつてたましひの汚れが洗ひ去らるゝ聖とき悔い改めと艱みが譬へられ、そしてたましひの第一の潔めは洗禮の水によつて爲されるからであつた。

されば彼が手を洗はうとするときには、彼はそこから落ちる水が彼の足に踏まれないやうなところを擇ぶのをつねとした、また彼が石のうへを歩むときには、彼は大いなる畏れと敬ひをもつて歩んだ、それは「岩」と呼ばれたまふ主の君の愛のためであつた。

それゆゑ彼は詩篇の歌の「なんぢはわれを岩のうへに擧げたまへり、」を唱へるときには、彼はつねに、彼の大いなる敬虔のこゝろから、「岩の足もとになんぢはわれを擧げたまへり、」と唱へた。

彼はまた火をたくために木を伐る兄弟につねに謂つて、一本の木をまつたく伐り倒さず、つねにその木の幾部分は傷つけられずに残るやうにせよと命じた、それは私たちの救ひを十字架の木のうへで果したまへる主の愛のためであつた。

おなじやうに彼は園を耕やす兄弟に曰つて、決して地面を悉く野菜のために耕やさしめずして、そのいくらかを残して緑の野の草の生へるやうにした、それは各のゝ季節に兄弟たちのために花を生じ、「野の花」と呼ばれ「谷の百合」と呼ばれたまふ神の愛のためであつた。

それのみならず、彼は園守なる兄弟にかならず園の幾部分に美しいたのしみをつくらなければならぬといふのをつねとした、そこにはあらゆる薫りよき草や、あらゆる美しき花を咲かせる草を植ゑて、そしてその季節となればそれらの草はこの草や花を見そして眺める人々を神の讚へに招くからであつた。何となれば、すべての被造物は聲たかく呼ぶ、「神は私をなんぢのために造られた、おゝ人よ。」されば私たち彼とともにあつたものは彼がこゝろのうちにもそとにもあらゆる造られたるものに於いて楽しんでゐるのを見るのをつねとした、そして彼らに觸れ、または眺めつゝ彼のこゝろは地上にあらずしてたゞ天にあるごとくに見えた。

そして彼が被造物に於いて感ずるをつねとしたおほくの慰めのゆゑに、彼の死ぬるよりすこしく

まへに彼は被造物のために主の讚美を作つて、これを聞く人のこゝろをはげまして神を讚へしめ、そして主が人によつてその被造物に於いて讚へられるよすがとした。

百十九

あらゆる他の理性をもたぬ被造物のうちで彼は太陽と火とをもつともふかき慈しみをもつて愛した。

されば彼はつねに言つた、「朝に太陽の昇るとき人はみな神を讚へなければならぬ、神はそれ私たちの益のために造られた、そしてそれによつて私たちの目は晝に明らかにされるのであるから。そして夕暮に夜となるときに人々は兄弟なる火、これによつて私たちの目が夜に明らかにされる火のために讚美をさしげなければならぬ、何となれば私たちはみな盲ひたるときもものである、そして主はこれらの二つ、私たちの兄弟たちをもつて、私たちの目を明らかにし給ふ。そしてそれゆゑに私たちはこれらとそして私たちが日々に用うる他の被造物について創造の主を讚へなければならぬ。」

そのことを彼はみづから彼の死の日にいたるまでつねに爲した、彼が大いなる病苦をもつていたまされてゐたときに彼は造られたものについて歌つた主の讚美を歌ひはじめた、そしての中には彼の伴侶たちをして歌はしめかくて主の讚へを思ふことによつて彼は病ひや苦しみのにがい味ひを忘れることができた。

そして彼は太陽を他の被造物よりも美しいと考へ、そしてしばしば主の君に譬へられ、聖書のなかにも主みづから「正義の太陽」と呼ばれたまふ故に、それゆゑに主が彼に天つ國を確かめ給へるときに主の被造物について彼の作つた讚美の歌に名をあたへて、彼はそれを「兄弟なる太陽の歌」と呼んだ。

百二十

これは主が彼に御國を確保したまへるときに彼の作つた被造物についての讚美である。

もつとも高き、全能なる。善き主よ、

讃へ、榮え、譽とすべての祝福はおんみのものなり、  
ただおんみにぞ、もつとも高きものよ、それらは屬し、  
しかして何人もおんみの名いふ値ひなし。

讃へられむ、わが主よ、すべてのおんみの被造物をもつて、  
わけて兄弟なる太陽の君をもて、

彼は晝をてらしよりてわれらにひかりあらしむ、

しかして彼は美しく、大いなる輝やきをもて光り、

もつとも高きものよ、おんみのみすがたをあらはす。

おんみは讃へられむ、わが主よ、姉妹なる月と星たちのために、

おんみは彼らを清らにたふとく美しくぞ造りたまへる。

おんみは讃へられむ、わが主よ、兄弟なる風のために、

しかして空氣と雲と、晴れたるまたすべての空のために、

これによりておんみは萬づのものにいのちをたまちたまふ。

おんみは讃へられむ、わが主よ、姉妹なる水のために、  
これはいと益あり、謙だれる、たふとく、きよきものなり。  
おんみは讃へられむ、わが主よ、兄弟なる火のために、  
これによりて夜は照され、しかして、  
彼は美しく、楽しく、健やかにして力つよし。

おんみは讃へられむ、わが主よ、姉妹われらの母なる地のために、

彼女はわれらをささへしかして載せ、

さまざまの果實と色彩られたる花と藥草とともに生みいだす。

おんみは讃へられむ、わが主よ、おんみの愛のために救し、

病ひと艱みを堪へしのぶものによりて、

これらを平和もて忍ぶものは福ひなるかな、

そは、もつとも高きものよ、おんみによりて彼らは冠せらるべければ。

おんみは讃へられむ、わが主よ、姉妹われらの肉體の死のために、

生ける人はいづれも彼女よりのがるるあたはず、  
禍ひなるかな、おそろしき悪しき罪のなかに死ぬるものは、  
福ひなるかな、おんみのもつとも聖とき御旨をさとるしものは、  
そは第二の死は彼らに害をなさざればなり。  
わが主を讃へ、祝ひしかして感謝せよ、  
しかして大いなる謙だりもて彼に仕へよ。

第十三章 彼の死について、および彼が死に近づけること  
を知つたときに彼の示した歡ばしさについて

## 百二十一

彼がアッシジの司教の宮にて病み臥し、そして主の御手がつねよりも重く彼のうへに壓しつける  
のおぼえたときに、アッシジの民は、彼が夜のまに死に、そして兄弟たちが彼の聖とき骸を他の  
市に運び去ることを恐れて、命令をだして夜ごとに衛士をして勤勉にそのところの壁のそとを巡ら  
しめた。

しかるにもつとも聖とき父みづからは、彼が日々にそして絶えず悩む苦痛の激しさによつて絶え  
入らむとする彼のこゝろを慰さめ力づけるために、彼の伴侶たちをして日のうちにしばし主の讃  
美を歌はしめた、そしてこのやうに彼はまた夜にもなさしめた、それは宮のそとに守りをなせる俗  
の人々の建徳と慰安のためであつた。

けれどフラテ・エリアは、祝福せられたるフランシスがこのやうな病ひのあひだで主に於いてみづ

からを慰さめそして楽しくしてゐるのをみて、彼に曰つた、「もつとも愛する父よ、私はあなたが示すあらゆる歡こばしさによつて、あなたの惱みのあひだにもあなたのためとあなたの伴侶らのために、慰さめられそして徳を建てられます。けれどこの市の人々はあなたを聖とき人として信じてゐますけれど、しかしながら彼らはかたく信じてあなたがこの癒えざる病ひによつて死に近づいてゐると思つてゐますから、これらの讚美が晝も夜も歌はれるのを聞いたならばこゝろのうちで謂ふであります。「この死に近づいた人は何故にこのやうな心輕さを示すのであらう？ 彼は死ぬことを考へてゐなければならぬのに。」と。

祝福せられたるフランシスは彼に曰つた、「なんぢは記憶してゐるか？ なんぢがフォリニヨにて異象を見たこと、そして私にある人がなんぢに私のもはや二年より永く生きないといふことを言つたと語つたことを。その異象よりまへには私がいかに、忠誠なる僕の心にすべてのよきことを示したまひ、そしてその口に置かせたまふ神の恩寵によつて、しばし私の終りを、日にも夜にも、思ひたえなかつたかをなんぢは見た、けれどなんぢがその異象を見たその時よりのちは、私は更に日に私の死の日を思ふことにいそしむやうになつたのである。」

そしてたゞちに彼はたましひの大いなる誠をもつて謂つた、「兄弟よ、私をして主に於いて歎ばし

めよ、主の讚へに於いてもそして私の病ひに於いても、私を助ける聖靈の恩寵によつて私は私の主にかばかり一つになりそして相合つて、彼のみめぐみによつて私はもつとも高き君に歡ぶことができるのであるから。」

## 百二十二

このころに彼をおなじ宮にアレゾのある醫者、名は善きジョヴァンニといつて祝福せられたるフランシスとはなはだ親しかつた人が訪れた。

そして祝福せられたるフランシスは彼に問うて謂つた、「あなたは、ベンベニニテよ、この私の水腫の病についていかに考へるか？」

彼はこの人をその名で呼ぶことを欲しなかつた、それは彼は「たゞ一つなるもの、即ち神のほか善なるものなし。」と謂はれた主に對する敬ひのこゝろから、善と呼ぶるゝ何人をもその名を言はうと欲しなかつたのである。おなじく彼は「しかして地のうへにて一人の人をも師と呼ぶなかれ、またなんぢら師と呼ぶるゝことなかれ。」と仰せられた主に對する敬ひから何人をも父あるひは師と

呼ばずまた彼の手紙にも書かなかつた。

そして醫師は彼に曰つた、「兄弟よ、あなたはよくなられませう、神のみめぐみによつて。」

そして祝福せられたるフランシスはふたたび曰つた、「まことのことを私に話せ、あなたはどう思ふか？ 恐れることはない、神の恩寵によつて私は死を恐れるほど心弱きものではない。聖靈の恩寵によつて私は私の主と一つになり、そして私は生をもつてとひとしく死をもつて満足してゐるのであるから。」

そのとき醫師は彼につゝまず謂つた、「父よ、私たちの醫術によれば、あなたの病ひは癒えませぬ。そして私は思ふに、九月の終りかあるひは十月の四日めに、あなたは死ぬるであります。」

そのとき祝福せられたるフランシスは、床のうへに横はつて、大いなる敬虔と尊信をもつて彼の手を主にさしだし、そしてこゝろと肉體の大いなるよろこびをもつて謂つた、「よくこそ來た、私の妹、死よ。」

### 百二十三

これらのことあとで一人の兄弟が彼に謂つた――

「父よ、あなたの生命と交はりはたゞあなたの兄弟たちにとつてのみならず、なほ全たき教會にとつて光明であり鏡でありました、そしてそれであります、そしてあなたの死もまたおなじくさうであります。そしてあなたの死はあなたの兄弟たちにとつて、そしておほくの他の人々にとつて悲しみといたみであります、けれどそれはあなたには慰さめそしてかぎりなき歡こびであります。いかにとなれば、あなたはもつとも大いなるいそしみからもつとも大いなる安らひに、あまたの苦痛と試ろみから永しへの平和へと、あなたがつねに愛しそして完たく守られた地上の貧しさから盡くることなきまことの富みへと、そしてそのやうに一時の死から永しへのいのちへと過ぎ往かれます、そしてかしこにてあなたはあなたの主なる神、あなたがこの世でそのやうにあつき誠とあこがれをもつて愛された神をまのあたりに見られるのであります。」

そしてこれらのことを謂ひをはつて、彼はうちあけて謂つた、「父よ、あなたはまことに知つていらつしやいます、主があなたに御藥を天つ國から送りたまふのでなければあなたの病ひは癒えがたく、そしてあなたは、ただ今醫師たちがあなたにあらかじめ曰つたやうに、もはや永く生きることができません。いま私がかやうにあなたにいひましたのは、あなたのこゝろが慰さめられ、そして



あなたがうちにもそとにも主に於いて歎こび、そしてあなたを訪れる兄弟たちや他の人々がある。あなたのつねに主に歎こべるを見、そしてこれを見る人々、そしてあなたの死ののちにこれを聞く人にとつてあなたの死は、あなたの生命と交はりかしかありしごとくそしてつねにあるべきことに永しへの記念であるべきためであります。」

そのとき祝福せられたるフランシスは、彼の病ひはつねよりもはげしく彼のうへに重かつたけれど、これらの言葉から新しき悦びを彼のこゝろに受くるごとくに見られた、そして姉妹なる死がそのやうに近くも彼をおびやかしてゐることを聞きつゝ、たましひの大いなる熱誠をもつて彼は主を讃へた、そして謂つた――

「されば、もしも主のみこゝろによつて私がそのやうにはやく死ななければならぬならば、フラテアンジエロとフラテ・レオネを私のもとに呼び、彼らに私にむかつて姉妹なる死について歌はしめよ。」

そしてこれらの二人が彼のところに来たときに、彼らはおほくの涙をもつて、聖者がみづから作つた「太陽とその他の主の被造物の歌」を歌つた。そしてそのときに歌の最後の行のまへに彼は姉妹なる死についての教行を加へ、そして謂つた――

おんみは讃へられむ、わが主よ、姉妹われらの肉體の死のために、  
生ける人はいづれも彼女よりのがるゝあたはず、

禍ひなるかな、おそろしき悪しき罪のなかに死ぬるものは、

福ひなるかな、おんみのもつとも聖とき御旨をさとりえしものは、

そは第二の死は彼らに害をなさざればなり。

## 百二十四

もつとも聖とき父が、聖靈の力により、また醫師の言葉によつて、彼の死が近くあることをたしかめたときに、そのときに彼は司教の宮にあり、そして彼はますます病重くなりそして彼のからだの力が彼を去りつゝあるのを見て、彼は彼みづからを病床にあるまゝボルチウンクラのサンタ・マリアに運ばしめ、彼が彼のたましひの光と生命とを識りはじめたそのところに於いて彼の身のいのちを終りうるやうにした。

そして彼を運べる人々がアッシジからサンタ・マリアにゆくみちの半ばなる宿小屋オステリアのところきたときに、彼は彼を昇ぐ人々に乞うて彼の床を地のうへに横へしめた、そして彼の眼の久しきそしてはなはだ重き病のために、彼はそれを見ることができなかつたけれど、彼は彼の床を向きなほさせた、そして彼の顔をアッシジの市のかたに向けさせた。そして臥床のなかですこしく身起をして、彼は市を祝福して曰つた――

「主よ、この市がむかし、私の信ずるところ、悪しき人々の處、住家であつたごとくに、そのやうにあなたのみめぐみの豊けさのゆゑに、あなたのみこゝろにかなふときに於いて、あなたはみめぐみの殊なる多くをこの市に示されました、たゞあなたの善のみによつてあなたはそれをあなたのもゝとして選ばれました、そしてその市をしてあなたをまことに知り、あなたの聖とき御名に榮えをさゝげ、そしてよき譽れの薫りをうかべ、聖とき生活と、まことの教へと、福音の完全を、ありとある基督者らに示すべき人々の處とし住家とされました。それゆゑに私はあなたに乞ひたてまつります、おゝ主イエスキリスト、みめぐみの父君よ、私たちの感謝なきを見たまはずしてたゞつねにあなたがこの市に示したまひたるあなたのもつともゆたけき慈しみを思ひたまひ、この市が永しへにこれらのあなたをまことに知り、あなたのもつとも祝こほほがるゝ榮えある御名を讃ふる人々の處し

かして住家としてあらむことを、永しへの永しへにアメン。」

そしてこれを言ひをはつて彼はサンタ・マリア・デリアンジェリに運ばれた、そこで、彼の齡の四十年と完なき滅罪の二十年を全くして、彼は、主の年の千二百二十七年に、十月の四日に主イエスキリストへとこの世から去つた、その主を彼は彼の全たきこゝろをもつて、彼の全たきたましひをもつて、彼の全たき力をもつて、彼のもつとも熱つきあこがれともつとも満ちみちたる情緒をもつて愛し、もつとも完全に彼の主のあとを踐み、もつともすみやかに主のあとより馳せ、そしてつひにもつとも輝やく榮えをもつて主に到達した、その主は父なる神と聖靈とともに生きそして統べたまふ、永しへの永しへに、アメン。

こゝに小さき兄弟即ち祝福せられたるフランシスの安全の鏡は終る、そこに人は彼の召されたるつとめと業の完全をまつたく照し見ることが出来る。すべての讚美、すべての榮えは父なる神、子なる神、聖靈にあれ。「ハレルヤー！ ハレルヤー！ ハレルヤー！」譽まれと感謝をもつとも光榮ある處女マリアにおよび聖とき殉教者クネラに、莊嚴と淨福を彼女のもつとも祝福せられたる僕フランシ

スに・アメン。この書はボルチウンクラのサンタ・マリアのもつとも聖とき處にて作られ、主の千二  
百二十八年に於いて五月の九日に完くされた。

この「一二二八年」はサベタイエ氏の刊本には疑問なしに保存されてあるが、普通には、新しい探求にもとづ  
いて「一三二八年」の誤寫であると解釋されてゐる。

—了—

## 目 次

第一章 (1).....	二
第二章 貧しさの完全について(二—二六).....	六
第三章 隣人に對する愛と慈しみと謙だりについて(二七—三八).....	三
第四章 彼と兄弟らに於ける聖とき謙だりと従順の完全について(三九—七五).....	三
第五章 掟の完全と全團體に對する彼の勤勉について(七五—八四).....	一四
第六章 兄弟らを完全にするための彼の勤勉について(八五—九〇).....	一六
第七章 キリストの受難に對する彼の愛と同情の恒なる熱情について (九一—九三).....	一七
第八章 祈りと神聖の業に對する、および己れと他人に於ける靈の歡こびの つとめに對する彼の勤勉について(九四—九七).....	一八
第九章 主が彼に襲ふをゆるしたまへるいくつかの試るみについで (九八—一〇〇).....	一九

第十章 豫言の靈についで(101—109)..... 122

第十一章 外的事物に關して彼についで(110—111)..... 124

第十二章 彼の被造物に對する、しかして被造物の彼に對する愛についで  
 (113—110)..... 123

第十三章 彼の死について、および彼が死に近けることを知つたときに示した  
 歡び(111—114)..... 121

「完全の鏡」の後に

「完全の鏡」はその薫りたかい姉妹篇「小さき花」とひとしくその著者を確定することのできない説話の輯録である。けれどその内容の大部分が聖フランシスの愛した弟子フラテ・レオネの筆記や談話から出てゐることはほとんど疑ふべくもあらず、したがつてこの人を「完全の鏡」の著者として名指すことは不當ではない。

聖フランシスの傳説の範圍のなかにフラテ・レオネはつねに一つのなつかしい性格的特徴をもつて表はれてゐる。彼は師からは“Frate Peorello di Dio”(神の愛らしい小羊)といふ優しい愛稱をもつて呼ばれ、そして友だちからは「よにめづらしき單純なる、聖とき人」として稱へられた。フラテ・レオネは聖フランシスの生涯のもつとも重要な時期に於いて親しき伴侶であり、司祭職として師の懺悔を聞き、師の病の看護者、しかして師の憂いと歡きのすべてを打ち明けられた人である。しばし一人の強き性格・英雄的な精神のかたはらに温順なる、柔和なるたましひが従ひ、そして偉大なる人がこの優しきたましひの秀でたる力を感じ、深き感情をもつて互ひに絆され結ばれることがある。吾々は聖フランシスとフラテ・レオネのあひだにもそのやうな結ばれを見ることができ

る。そして聖フランシスは生涯の悲劇——何となれば聖フランシスの生涯は一つの悲劇にほかならなかつた故に——の最後の緊張のあひだに感じた自己の人間の悲痛のすべてを彼のやさしき友のまへに啓き示し、そしてそれとともに彼の偉大なる心が、その悩みの大いなるだけ、それだけですます確かに感じた信仰の楽しさ、基督者的歡喜を友のすなほなる心に印象せしめたのである。

さればフラテ・レオネが聖者のために生涯の追想録を書いた動機はもつとも自然なものである。師の伴侶として旅行にも、静けき隱棲にもともに在り、師のひそかなる祈りや神への切なる哀求を目睹し、そしてことに師の深き内心の信頼を頌ち有したレオネは己れのまへに起れる一つの生涯の偉大さを感じ、それが一つの聖ときものであることの確實なる意識をもつてゐたのである。そしてこの意識をもつてフラテ・レオネは自己を聖者のための證し人となし、彼の主人公をすべての人のまへに記念し、讚美しなければならないと感じたのである。

「完全の鏡」にはそれ故に一つの内的な焰が感ぜられる。筆者はもはや亡き人が再び生きてゐると信するまで己れの書くものの中に魂と心を打ち込まうとしてゐる、筆者のたましひのまへには主人公の身振、舉動、言語、表情のすべてが細微も忘却されず顕然としてゐる、そして筆者はその記憶を永久のために丸彫せんと試みてゐるのである。記述の修辭的拙劣、言語のぎこちなさ、また

筆者が他方に著作の動機としてつてゐた論争的<sup>ドクツリニシ</sup>な目的（フラテ・レオネは彼の目に聖フランシスの團體がその創設者の意圖から背反しつゝあると考へられたる時代に對して何が眞に聖フランシスの企てであつたかを示さうとしてゐるのである）にかゝはらず、フラテ・レオネの記述は獨創的であり、力つよき、清新なる詩味を有する。そのために「完全の鏡」は單に中世の歴史的文書たる以上に、恐らく中世の文書中これに比ぶべきものゝない情緒の緊張を示し、人間のたましひの記録<sup>document</sup> humanである。

フラテ・レオネは聖フランシス文獻の他の重要な一つ "Legenda trium sociorum"（三人の兄弟らの物語）の筆者の一人であり、そして彼のうるはしき情操が「小さき花」のなつかしい雰圍氣を形づくつてゐることはあきらかである。彼が聖フランシスについてあまたの記録を書いたことは證據だてられてゐることであり、「完全の鏡」はそれによつて形成されたものである。この書の成つたのは一三一八年であるが、けれど、上に日つたやうにして内容の大部分は聖フランシスの死後まもなく、そして若干はすでに聖者の生けるあひだに、書かれたものである。聖フランシス研究の根本資料としての「完全の鏡」の重要な意義は改めて言ふにおよばないものである。

「完全の鏡」は諸ろの徳を標題とした各章のもとにその説話を排列してあるために一般には時間の

順序と交渉がない、けれどこの書のなかの材料から一つの生涯の姿を構成することを試みる人のために能ふかぎりにおいて時間的順序を示す必要があると思ふ。「完全の鏡」の定本を刊行したポール・サバティエ氏の考證 (*Speculum perfectionis*, p. LXXXVII-KCIII) に従へば——

聖フランシスの回心以後。九二。

リヴォルト居住の頃、および團體の初期。三六。四四。二四。二七。二八。二六。五五——  
五七。一八。一九。

一二二七年夏。六五。

一二二八年六月。六八。

一二二〇年夏——秋。六。三。七八。三九。

一二二〇年九月より翌年三月まで、即ちビエトロ・ディ・カタニが聖フランシスの代理者であつた時代。五八。三八。六一。四三。

一二二二年——一二二四年の間に於いて。六四。

一二二〇年——一二二六年の間に於いて。四。八。四〇。四六。一〇二。

一二二三年夏。一〇五。

一二二三年秋そして冬。一。六七。九四。

晩年の間に於いて。八一。九八。

一二二四年九月。九九。一一七。七九。

一二二五年夏、秋および冬。九一。一〇〇。一二〇。一〇四。一六。一一〇。一一五。三三。

一二二六年。四一。

一二二六年春および夏。五三。一〇。七四。八七。三〇。三一。二二。

一二二六年、アツシジ司教の家の滞在の間。二。一〇九。一一一。一〇一。一九。二二——  
一一三。

一二二六年秋。一二四。八〇。八九。九〇。一〇七。一一二。一〇八。八八。一一三

なほつぎの若干は蓋然的に年代を推定することができる——

一二二七年ころ。一一。

一二二三年ころ。一三。

一二二四年——一二二五年の間の冬。二九。

晩年に於けるある聖誕祭。二〇。六一。

私の翻譯はポール・サバティエ氏の刊本に據る、すなはち——

Collection d'études et des documents sur l'histoire religieuse et littéraire du Moyen Age. Tome

I. Speculum perfectionis seu S. Francisci Assisiansis Legenda Antiquissima, auctore fratre

Leone. Nuno primum editit Paul Sabatier. Paris, Librairie Fischbacher 1898.

「小なき花」のばあひと異つて私はこの翻譯を口語で試みたのであるが、私はそれによつて得たところがあると同時に他方に失つたものも少くないことを氣遣ふ。また私の始めの計畫ではこれに添へて聖フランシスの自身の書いたもの、少くもこれに関係した數篇即ち彼の遺言書、訓戒、若干の書簡を譯すつもりであつたけれど、それらはすでにさきに出版されたヨエルゲンセンの「聖フランシス」のなかに翻譯されてある以上は再びここに掲載する必要はない。また私は「完全の鏡」が解説なしにただちにまつたく理解されるであらうとは信じないのであるが、そのやうな解説の材料もヨエルゲンセンやサバティエの聖フランシス傳記のなかに十分に見いだされる故に特に説明を書き添へることをしなかつた、そしてこの點については特に讀者の容赦を乞ふ、それとともに私は讀者が特にヨエルゲンセンの「聖フランシス」を参照されむことを乞ふのである。

(洛東鹿ヶ谷にて一九一九年二月)

大正八年六月四日印刷  
大正八年六月十日發行

(定價金壹圓貳拾錢)

著者 久保正夫

東京市牛込區矢來町三番地中の丸

發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町中の丸

『 完 全 の 鏡 』

發行所

新潮社

電話番町(長)八〇九番  
八九九番  
振替東京 壹七四貳番

印刷所

東京市神田區宮本町五番地  
電話下谷四〇六七番

新潮社印刷部

(印刷者)

高橋治一

—是れみいじき信仰の書也限りなく美しくしき藝術品也。

文學博士 姉崎正治氏序 久保正夫氏譯 (初版再版發賣)

### ■ 聖フランシスの小さな花

- ▼ 特製大阪美本
- ▼ 紙數三百五十頁
- ▼ 定價 一圓三十錢
- ▼ 郵送料 八錢

この書は、アツシジの聖者が靈的生活の尊さと、信仰の強さと、愛の熱情の美しくしさとを描けるものにして、興味深く藝術的の匂高き小話の、いづれも深甚の意味を寓して、敬虔にして熱烈なる愛と信とを語れるもの、幾十篇を主として成り、第二のバイブルとして西歐の人々に愛誦せられつゝあるもの也。原著者の定かならぬと云ふにも、却つて其の經典的權威のかりそめならぬを見る可く、ザパティエ、ヨエルゲンセンなどの此の聖者を研究せる、皆此の書によれるは人の知る所ならむ。

### 姉崎文學博士

の序中に曰く、新しい優しい譯文で「小さな花」を読みも行けば、その美はしい「小さな花」の生え出たオンブリアの野山に心は引かれ行く。オリブの緑滴る下には薄紅の馬ごやしが咲く。この草と花と、皆會ては「貧しき者」を以て自ら任じた聖者と彼が兄弟等の素足で歩んだ跡でないか。仰けば碧空に聳ゆるスベシオの山、俯しては水澄むラスメネの湖、是れ皆彼の聖者が神に祈り、主の御旨に接した跡である。彼れが癩病患者の救ひを始めた小屋も、衣服を投げ出して裸體のままの己れを神に捧げ始めたダミアノの堂も、悪魔の試みに抗して静かに祈念に沈んだカルツェリの庵室も、此等會遊の跡は、「小さな花」を讀むと共に歴々眼前に髣髴する……「小さな花」は「フランシス」と其門人等との天真爛漫な生活の記録である。そして其物語の内容のみならず、筆つきに於ても、無邪氣で徹底して、柔かて然かも力があり、楚々人を動かす點に於てもフランシスの精神を能く代表してゐる……フランシスを知るには第一「小さな花」を以て始めるが至當である。久保君が「小さな花」の翻譯を出したのは、日本に於けるフランシス研究の最も意味あり趣味ある事業である。……



生田長江氏譯

ニイチエ全集

第二編

人間的な餘りに人間的な

全二冊

(再版)

別に題し、「自由思想家の爲めの書冊」と云ふ。人間的なる餘りに人間的なる現実の冷光を以て、理想的なる餘りに理想的なる幻影を照破し、酷烈なる偶像破壊の鐵槌を打ち下したるものはこれ也。全篇を通じて、珠玉の如く、七首の如く、火藥の如きニイチエ獨特の警語と箴言とより成る。而してその箴言と警語との、如何に簡潔にして明快なるかを、如何に尖銳にして辛辣なるかを、如何に激越にして暴烈なるかを見よ。

第三編

黎

明

全一冊

(新刊)

「人間的な餘りに人間的な」に於て理想的な餘りに理想的なものより解放されたる彼は本書に至つて更に人間的な餘りに人間的なものをも、實證論的反動の乾燥と低調とを超越し、藝術家ニイチエ自身への健全なる歸還を表明せり。而して前きに冷酷の否定を辿りしものは、その否定の道を行き盡くして、漸く熱烈の肯定に向むとす。これは是れ、大なる否定の後の大なる肯定への一轉機也。壯烈なる新生命の曙光也。

第四編

悦ばしき知識

全一冊

(新刊)

第五編

季節はづれの考察

(近刊)

總洋布最上製極美本、一冊壹圓六拾錢、郵送料八錢

フリードリッヒニイチエ著

第八版出來

ツアラトウストラ

森 鷗外氏序  
生田長江氏譯

總洋布最上製  
價一圓八十錢  
小包料十二錢

是れ晩近歐洲思想界の巨人ニイチエの代表的著作也。彼の奔放なる詩歌や、深刻なる哲學や、悲壯なる宗教や、悉く收めて此の中に在り。以てニイチエの眞面容を知る可く、以て晩近思潮そのものの精髓を知る可し。譯は生田氏が數年の苦心に成り、精嚴にして莊重、よく、原文の精神風格を傳ふるものと稱せらる。

本書を讀まずして近代の文明を語る可からず (時事新報 評中の言)

近代思想十六講

中澤臨川氏述  
生田長江氏述

第十三版  
特製極美本  
一圓五十錢  
送料十二錢

中澤生田の兩氏が其蘊蓄を傾けたる名著也。大版六百頁の雄卷、近代思想の種々相を挙げ、具さに其眞意義を説く。而して説述飽くまで平明、飽くまで詳密、此種の書の通弊たる難解晦澁の憂あること斷じて無し。最も速成的に、而して最も完全に近代思想の眞髓に通せんとする人の必讀を要するものたり。賣切また賣切、今や實に第十三版を發賣するに至れり。

□ 類 書 譯 翻 □

トルストイ	ユイゴーレ・ミゼラブル	ドストエーキイ	同	同	同	ルツソオ	アルバアセイフ	ダンヌインオ
戦争と平和	レ・ミゼラブル	カラマーゾフの兄弟	虐げられし人々	罪と罰	痴	懺悔録	サアニン	死の勝利
昇川 曙夢 譯	豊島與志雄 譯	米川正夫 譯	昇 曙夢 譯	中村白葉 譯	米川正夫 譯	生田長江 譯	中島 清 譯	生田長江 譯
全三冊 定價金五圓 郵送料貳拾錢	全四冊 一冊壹圓六拾錢 郵送料一冊八錢	全三冊 一冊壹圓參拾錢 郵送料一冊八錢	全一冊 定價壹圓六拾錢 郵送料八錢	全二冊 一冊壹圓參拾錢 郵送料一冊八錢	全二冊 一冊壹圓七拾錢 郵送料一冊八錢	全二冊 一冊金壹圓〇錢 郵送料八錢	全一冊 定價壹圓七拾錢 郵送料八錢	全一冊 定價壹圓拾錢 郵送料八錢

325  
550

終

